

研究の窓

市場経済とボランティア経済

学校の「試験」というのは嫌なもので、必要悪かもしれないが無いに越したことはない、と思っていた。小さな子供をよく親が私立の学校へ入れたがるのは、ところてん式に入学試験を受けずに大学まで進めるからだ。ところが教師となって試験を課す側にまわると、試験問題を作ったり採点をするより、試験を受ける方が余程、楽だということがわかった。さらに、「試験」を何とゲーム感覚で楽しんでいる学生、つまり得点を上げることに喜びを感じている学生がいることを知った。確かに試験が楽しいと試験勉強にも集中するし、点数もよくなるという好循環が生まれる。

「仕事」はどうだろう。昔、働くというのは苦痛を伴うものであり、その代償が賃金だといわれた。「くかんろうどう苦汗労働」という言葉すらあって、まさに額に汗して働くというイメージである。その後、技術が発達して、筋肉より頭脳（右脳や左脳）を使う仕事が増えた。単純な繰り返し作業や3Kの仕事は、機械にとって代わられるようになった。現場の仕事は、昔と比較できないくらい楽になった。知的な仕事は、変化や刺激に富み面白い。また、適当に難しい仕事は、達成感がある。仕事は、だんだん楽しみの部分がふくらんできたようだ。このような傾向が続くと、さんけい窮極では、仕事が遊び化し、仕事と遊びが一体化するのではなかろうか。

市場経済の下では、仕事は雇用契約から始まり、組織のヒエラルキーに従って分業体制でおこなわれる。そして、採用、労働時間、給与、退職……など、法制や規則や慣行がこれを支えている。ところがいまの時代、アダム・スミスのいう分業は、利益をもたらさなくなった。それは、大量生産から離れ、仕事の内容が総合的、創造的、個性的となると、ヒエラルキーや分業に適さなくなったからだ。組織は、ピラミッド型がフラット化し、さらにネットワーキング化する傾向にある。

市場経済の下では、仕事の代償は給与や労働条件である。しかし遊び化した仕事の場合、物的な報酬というのは常に魅力があるわけではない。代わりに、働く時間を自由に決めることとか、好きな仕事を選ぶこととか、仕事の成果が仲間に高く評価されることなどが重要である。このような領域では、価格や規格化された品質をメルクマールにして活動をするのではなく、感性や共感や満足感が活動の源泉になるのが特徴である。

しかしもともと市場経済の企業といっても、さまざまな個性があるから、企業は利潤を最大にしようとするものとか、マーケットシェアを拡大しようとするものとかでくくるのは早計である。労働者やその家族の生活を第一に考える経営者もいるし、利益の追求や企業の成長促進に余念のない経営者もいる。また、社会貢献やフィランソロピーに力を入れる企業もあるし、そうでない企業も数多いものである。

市場経済を生産の場とすると、対応する生活の場がある。生活は消費という経済活動を含むが、必ずしもすべてがお金で計ることができない。たとえば、家庭とか、コミュニティとか、同窓会

など、経済原則で動いているわけではない。この領域を、「ボランタリー経済」と呼ぼう。ボランティアも、このボランタリー経済の一つの活動である。これもまた、無償ボランティアから市場賃金に近い報酬を受けるボランティアまで、ボランタリー度はさまざまで、市場経済と重なる部分も少なくない。

学校や病院やホテルも、このようなボランタリー経済と重なっている。とくに、塾、高齢者用施設、ベビーシティング、民宿など、公営でないところで、地域性や個別性が強くてボランタリー度が高い。このようなボランタリー経済の下では、人々は経済合理性や効率性を追うよりも、手間や時間をかけて手づくりの味を楽しんだり、社会参加に意義を見出したりする。日本ではこれまで、女性や高齢者の活動がボランタリー経済に多かった。

ところでいまは、企業も個人も多様化・個性化の時代である。同時に、いろいろに変わりたいし、変わらざるを得ない場合もある。これまでの市場経済の決まりはあまりにもワンパターンで、変化に適していない。規制緩和は、いずれにしても必要のようだ。他方、雇用の場は、市場経済では吸収しきれないかもしれない。そこでこれからは、市場経済とボランタリー経済の重なりを厚くし、ボランタリー経済を市場化し、市場経済のボランタリー度を高めることが必要ではなかろうか。

佐 野 陽 子

(さの・ようこ 東京国際大学教授)